である．折悪しく大震災におそわれた時期で，調査にも資料整理にもとりわけ苦労が多かったことだろう．過去に記録や標本があるものの，今回確認できなかった植物がたくさんあるのは当然の成り行きだが，新記録の植物も数多く見つかったという．自然の調査というものが,「これで終わり」というものでないことを実感させる．内容は1.調査地域の自然環境，2.植物調査研究史，3.植物相の特徴，4.六甲山地の絶滅危惧植物，5.生物多様性の保全をめざして，6.六甲山地の植物目録，7.文献，付表1.採集地点一覧，付表2.研究史年表（1879～1960年），索引である．第3章では注目される植物として78種類が，分布図つきで45頁にわたって詳述されている．その中で，絶滅危惧種の選定に「昔はたくさん見られたのに今は...」と感覚的に判断することのあぶなかしさの例として，タカサゴソウのケースが述べられている．本書の主体をなす植物目録は175頁にわたり，シダ植物以上1693種類が記録され，植物名に続いて産地と標本が列記されている．検索表や形態の記述はなく，産状や分布についてごく短いメモがついていることがある．標本の大部分は頌栄短期大学の収蔵品で，引用は採集者略号と採集番号，頌栄短大以外の標本は必要に応じて所蔵表本室記号や日付が付加されている．過去に記録があるが確認できなかった種類については，脚注にコメントされており，著者の判断で「誤認と思われる」というような記述も少なくない．従来の植物誌は先人の記録に上乗せして種類数の増加を単純に誇る傾向があり，こういう否定的な記事はなかなか書きにくいものであるが，自然を正しく認識する上で是非必要で，後続出版物が見習ってもらいたい．付表2では主要な植物の記録や主な行事，出版物の刊行時点が列挙されている．全体として簡潔で手堅い印象で，地域植物誌の一つの行き方を示すものだろう．注文をつければ，標本の引用が簡潔に過ぎてわかりにくい．データベースとの関係と思うが，採集者の略号がたくさんあって，一々凡例を覗かないとわからない．ページを切り離して作業に使おうとすると（そういうことをやる人間がいるのである)，面倒なことになる．略号はデータベースには便利だが，人が読むときには翻訳しておいてくれた方がよい．機関略号程度なら，数が少ないからどうということはないが... データベースの立場からは，人名の略号は姓を先頭にしておいた方が整理に便利なのではあるまいか？また，採集者が複数のときには一々それに対応した略号を用意しているが，これは将来行き詰まる心配がある．もう一つは採集地点一覧で，行政地名でリストされているのだが，他所者には具体的な位置の見当がつかない．これは地図に図示してほしかった．連絡先は次のとおり．神戸市公園緑化協会．651-0083 神戸市中央区浜辺通5-1-14 神戸商工貿易センタービル（Tel 078-232-4461 Fax 078-232-1498)．（金井弘夫）

六甲山は植物の豊富な所として知られ，昔からの多くの人が採集に行っている所であるが，今回それらの成果を纏めて発表したものである．現地調査以外に京都大学，都立大学などの所蔵標本も調べ，遺漏なき完成を目指して纏められている．シダ植物，被子植物の野性植物1693種，帰化植物266種が記録されている．六甲山は宅地や砂防ダムの造成のため著しく荒らされていて，過去に採集されていても，現在は見つからないものもかなり存在するようであるが，過去に採集された標本は，その地域の地域のかつての環境を示す上で貴重なものである．多数のカラー写真と，稀少な植物の標本の写真が載せられていて，一地域の植物誌としては豪華な本である．六甲山で注目される76種の植物の解説が付けられ，その過去と現在の状態，近畿地方での分布が述べられているのは貴重な記録である．本書は地方の植物誌を作る場合のよい例を示すものであろう．このような形で兵庫県植物誌が作成されることを期待する．

（山崎　敬）

□山岸高旺・秋山　優（編）: **淡水藻類写真集 第20巻**　100pp．1998．内田老鶴圃．¥7,000＋税．

淡水藻の同定を主な目的として作られた写真集で，顕微鏡写真による藻体の全体像と分類上の特徴となる部分の拡大写真，それに必

要に応じて電子顕微鏡写真や線画を添えて図版が構成され，それぞれの図版には和文と英文の記載がついている．ほとんどの場合，淡水藻の同定には顕微鏡を使うので，見た状態がそのまま再現される写真図は藻類の実態を示すのに効果的な面が多く，同定のよい助けとなる．1頁に1種，1巻が100頁より成るので，計100種が収録される．1984年に第1巻が刊行されて以来合計2,000種の淡水藻が収録されたことになる．かつて同じ出版社から出た日本産淡水藻図鑑（1977）の収録種類数が2,308であり，ほぼそれに近い数の淡水藻を写真で見ることができる．わが国の湖沼，池，水田，河川などで普通に見る微細な淡水藻のほとんどが収録されるので，藻類の研究者だけでなく，広く藻類に興味を持つ人，環境問題，水理・土木の問題等に関係をもつ機関や研究所にも備えておきたい出版物である．既刊行の諸巻の価格は1，2巻各￥4,000＋税，3～10巻各￥5,000＋税，11～19巻各￥7,000＋税である．なお，珪藻類は収録されていない．この分類群は別の本として同じ出版社から近く刊行の予定という

□山岸高旺: **淡水藻類写真集ガイドブック** 144pp. 1998. 内田老鶴圃. ￥3,800＋税.

先に20巻の刊行を見た山岸高旺・秋山　優（編）「淡水藻類写真集1～20巻」（内田老鶴圃，1984～1998）は図版ができた種類から順に1頁に1種を扱い，次々とルーズリーフ形式にファイルして巻が構成されている．編集上の理由と思われるが，目的とする種類が所属する綱・目・科等がどのような特徴をもつかの解説や，その種がどのように分類されているかの検索表などの頁がない．このため藻類を知り分類系をよく理解する人には利用しやすいが，初心者や専門外の人々にとっての十分な利用は必ずしも容易でない．「写真集」の編者の一人，山岸博士は淡水藻の全体像をとらえることができ，「写真集」の利用をより容易にする目的で本書を書き下ろしたという．「淡水藻写真集」の使い方，図版の項目の説明，学名の解説等の導入部に続く6章で写真による淡水藻類12綱の代表属，次いで7章淡水藻類の体制と生育状況による代表的な属の分類，8章「写真集」に収録の属の写真と解説と続き，最後に「写真集1-20巻」に収録の属，種の学名と和名（学名の仮名読み）の索引を収める．6章と7章が特徴的で，6章では12綱の代表的な属が113枚の写真図と線画で紹介され，7章では，1游泳性．a被殻のない単細胞性，b被殻をもつ単細胞性，c群体性; 2浮游性．a単細胞性，b群体性; 3付着性．a単細胞性，b群体性; 4糸状体性; 5紐状体性; 6葉状体性; 7嚢状体性・管状体性に区分し，それぞれに代表的な属が94枚の写真で紹介されている．系統・体制ともに多様な淡水藻類の検索表は複雑で，その利用は簡単でない．そこで，文字による検索に代わるものとして，上記のような写真と図で見る検索を著者は考えたという．淡水藻類の全体像を理解し，分類群の特徴を知るよい方法として，本書の写真・図を繰り返し見ることを奨めている．「淡水藻写真集」とセットに備えると写真集の利用に便利であり，淡水藻の分類の大要を知るにも便利である．　（千原光雄）

□岩槻邦男: **根も葉もある植物談義** 254 pp. 1998. 平凡社. ￥2,000.

盆栽協会の会誌に連載したもので，35種類の植物，主にポピュラーな樹木，について一種一話にまとめてある．植物学ばかりでなく，古典や文学からの引用，著者の実地体験に基づく見聞も加わり，進化や環境保全のことまでさりげなく織り込まれている．読んでおくとずい分話しのタネを仕入れることになるだろう．　（金井弘夫）